

“キラリ企業”の現場から

第

116

回

お客様の想いをかたちにする化粧品容器加工

中井紙器工業株式会社

老舗の紙加工業

中井紙器工業株式会社(以下同社)の本社を訪れると、ショーケースに華やかで美しいデザインの箱が並んでいる。丸い箱や四角い箱など、どれも手の込んだ芸術品である。大正6年に紙製品加工の専門企業として創業し、現在は大手化粧品メーカー向けの高級化粧品容器、美容用フェイスマスク、パレットケースなどを製造している。中井久次郎氏が創業し、来年100周年を迎える老舗である。創業当時は、黄ボール紙芯材(注1)を使い、断裁から貼り加工までの工程を手作業で行っていた。当時の主な製品は、下駄函、草履函といわれる履物の箱、和風小物入れなどであった。

高級化粧品容器の製造へ

昭和29年に株式会社へと改組したのをきっかけに新たな分野へ進出することとなる。化粧品用容器の製造である。履物の箱や和風小物入れに始まり、ブリキの玩具や洋菓子の箱といった多業種向けの箱を製造してきたが、ここで他社との差別化を図ることを目指し、“高級化粧品容器”を手掛けるようになった。化粧品容器の発注元は、現在でも大手として存在している化粧品メーカーで、このメーカー専用の加工所を作り、生産を行っていた。2代目・幸太郎氏のモットーは「ものづくりは手を抜かず製品ひとつひとつを丁寧に作る」こと。丁寧な作業によって作られた貼り箱は現在と変わらず高品質で美しく、その技術は現在でも受け継がれている。

そして、デザインだけでなく、加工技術においても諸外国が真似をできない優れものである。同社の丸箱は嵌合と呼ばれる、紙蓋と本体のはまり具合のフィット感は、ベテランの経験による細かな職人技から生まれる。この貼り箱の加工技術は受け継がれ、一つの芸術品のような存在感がある。

また、同社の扱う製品は、直接化粧品を入れるものであり、肌に触れるものであるため、食品と並ぶ厳しい検査能力が求められている。同社はこれまで、異物の混入など不具合がほとんどないことが強みである。



貼り箱と丸箱

会長の入社による事業方針の改革

昭和38年に、戦後初めて海外の大手化粧品メーカー3社が日本に進出し生産を始めた。この頃には、同社の主要製品は化粧品容器に移行し、これら海外のメーカーも含め、丸箱や四角い貼り箱などの容器の生産を一手に引き受けた。このことが現在の同社の基礎となっている。昭和60年代に入りバブル景気になると、顧客である大手化粧品メーカーの製品の多様化が進んでいった。そんな中、幸太郎氏の男六人兄弟の末っ子である孝行氏(現会長)が、繊維関係の商社勤めを辞め同社に入社した。チャレンジ精神旺盛な孝行氏は、商社勤務時代の経験を活かし、素材や成形加工など紙箱以外の多くのことも学び、顧客のニーズに応えるべく新しい製品開発を行ってきた。これまでの受注生産のみの企業から脱却し、素材から形状までを提案していく開発提案型企業を目指した。現在も売上げの多くを占めているフェイスマスクやシフターと呼ばれるフェイスパウダー容器内のメッシュなどは、他社では真似できない素材や技術が多く詰め込まれている。平成21年度に「湿式加圧モールド製



東京工場の検品作業

公社の支援サービスをご利用いただいている元気企業を紹介する“キラリ企業”の現場から。第116回は、大手化粧品メーカー向けに化粧品の紙箱容器加工を行う老舗の中井紙器工業株式会社(台東区)をご紹介します。同社には当公社の「自家発電設備等導入費用助成事業」や「経営研修事業」などをご利用いただいています。



企業
情報

中井紙器工業
株式会社
代表取締役 社長
中井 正裕 氏

代表者 / 中井 正裕
資本金 / 3,000万円
所在地 / 東京都台東区東上野3-34-6
 ヒューリック東上野ビル 4 階
TEL / 03-3833-8261 FAX / 03-3833-8265
URL / <http://www.nakaishiki.co.jp/>

法」によるパッケージを開発し、この技術は、同23年度に“葛飾ブランド”として葛飾区から認定された。一枚の紙を水溶液に浸し、乾燥、プレスを繰り返すこの独自の技術は接着剤を一切使用しない製法で、設備投資や金型代の大幅な低減化を図ることができるなどの利点もある。このパッケージを大手化粧品メーカーが採用し、“日本パッケージデザイン大賞”をはじめとした数々の賞を受賞している。

異業種交流が公社との出会い

公社との出会いは、約30年前の昭和62年、異業種交流が注目された頃に遡る。当時はまだ、企業同士のつながりがそれほどなく、公社が、“企業間連携”を推進するために様々な業種の企業による“異業種交流グループ”のメンバーを募っていた。このグループに同社が参加したことが公社との最初のつながりである。会長の孝行氏は、「公社の異業種交流グループ(注2)に参加したことで、ものづくりに前向きな経営者達とたくさん出会えた。お互いが良い刺激となり、とても勉強になった。その時のメンバーは、今でも大きく伸びている会社が多いよ。」と笑顔で話した。その後、平成7年度から開始した海外取引展開状況調査団(注3)に積極的に参加され、中国、タイ、ベトナム、インドなどの国々を訪れ、現在は上海に営業所を設立している。公社の事業は、多々活用されているが、葛飾区小菅にある東京工場には、平成25年度「自家発電設備等導入費用助成事業」(注4)を利用され、工場の作業場全体をLEDランプに交換している。工場全体の節電になるだけでなく、検品作業を重視する同社にとって、手元が明るくなり作業環境が改善されたようだ。



フェイスマスクとシフター

社長の交代と今後に向けた製品開発

平成26年、正裕氏が社長に就任。「人材育成は、日々の忙しさに流されて、場当たり的になってしまいがちであるが、今後も公社の実施する研修などに参加し、『リーダー的な人材』を育てていきたい。」と話す。

今後の同社の展開を伺うと、「人件費などコストを考えると、日本で良いものを作り続けていくことは難しくなってきた。日本は紙の品質も良く、印刷技術も高い。今後も先代達が作りあげてきた当社の原点である紙箱加工を残しながら、顧客の日々新しい要求に対応するクオリティの高い製品開発を目指していきたい。」と話された。

今後も代々受け継がれてきた美しい箱作りを絶やすことなく、顧客のニーズに応える製品開発を進めていく同社の発展に期待したい。

(企業人材支援課 石井敦利)

(注1) 黄ボール紙芯材…

板紙の一種で貼り箱の芯の材料として使用されている。わらを原料とした黄色っぽいボール紙。

(注2) 異業種交流グループ…

「共同受注」や「新技術・新製品開発」を目的とした異業種交流グループを育成・支援する事業。公社が昭和62年から実施。

(注3) 海外取引展開状況調査団…

中小企業が海外に生産拠点を移すなどの展開を図ることを目的にアジア諸国を中心に中小企業の経営者等を派遣した事業。公社が平成7年度から実施。

(注4) 自家発電設備等導入費用助成事業…

都内中小企業者が行う工場照明のLED化や自家発電設備、蓄電池等の導入費用の一部を助成。平成28年度から事業名を「節電対策設備等導入費用助成事業」に変更。